氏　　名	：	花家　彩子
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第２８４号
学位授与年月日	：	平成２８年９月２７日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	如月小春「八月のこどもたち」記述群における演劇と教育 オートエスノグラフィーによる研究
論文審査委員	：	（主査）准教授　高尾　　隆 （副査）教授　岩川　直樹　　教授 小野　康男　　教授 中島　裕昭 教授　中地　雅之　　教授 山田　一美　　（東京学芸大学）

学 位 論 文 要 旨

【研究の目的と方法】本研究の目的は、演劇教育実践と呼び得る実践について、実践報告を読もうとする読者が、これまでに書かれた実践報告の成果をふまえて自分の実践を個別的にふりかえる方法を提案し、それが有効に機能することを示すことである。本研究では、1990 年代に如月小春（1956-2000）によって書かれた実践報告である「八月のこどもたち」記述群について、筆者自身がこれをふまえて筆者自身の実践を個別的にふりかえることを試みる。本研究はこの目的を達成することによって、演劇教育実践について個別的なふりかえりの記述と読解の連環を実現し、遂行された実践の成果を蓄積可能なものとすることを目指している。

如月小春は 1980 年代から 90 年代にかけて活躍した劇作家・演出家であるが、90 年代には子どもや地域の人々との演劇づくりに力を入れた。「八月のこどもたち」記述群とは、如月が 1991 年から 2000 年までその活動を牽引した兵庫県立の大型児童館こどもの館における実践「こどもの館劇団」の活動についての、如月自身による複数の記述である。

本研究は、個別的なふりかえりの方法としてオートエスノグラフィーに着目し、如月小春「八月のこどもたち」記述群について、筆者がこれをふまえて筆者自身の演劇教育実践に対する理解を更新していった物語をオートエスノグラフィーとして記述する。

【第１章】第１章では、演劇教育実践について、本研究における演劇教育実践という単語の捉え方を示し、これまでの演劇教育実践の経緯と、先行研究の内容を確認した。この作業によって、これまで行われてきた演劇教育実践と呼び得る実践について、演劇実践に対する教育的評価の基準や観点は評価者に依存するものであったことが確認された。その上で第１章の結論として、演劇教育実践のふりかえりは、演劇実践の経験の個別性をふまえたものであるべきであること、さ

らに、そのような個別的なふりかえりを蓄積できるような方法が検討されるべきであることが導かれた。

【第２章】第２章では、個別的なふりかえりとその記述を達成することのできる方法として、オートエスノグラフィーの方法論を検討した。まず、これまで演劇教育実践についての個別的なふりかえりは多くの実践報告に記述されてきたが、このような実践報告は、実践に対する執筆者自身の自己肯定感と情緒を内包しており、これらが実践報告を読者に批判的に検討されることを拒んできたことを確認した。つぎに、オートエスノグラフィーの方法論はこのような執筆者の自己肯定感や情緒を直接的に扱う方法であることを確認し、この方法論に基づけば、実践報告において執筆者の執筆の動機と読者が実践に対して持っている期待とのずれを明確化できる可能性があることを指摘した。このずれを手がかりとすれば、実践報告を批判的に検討することが実現できると見込まれ、そのような批判的な検討を通して読者の実践に対する理解が更新された場合、その様相はオートエスノグラフィーの記述の方法を援用することで記述できることを確認した。

【第３章】第３章では、如月小春の実践報告「八月のこどもたち」記述群の内容を検討した。この検討は、「八月のこどもたち」記述群の執筆者である如月小春自身に焦点をあてることで、如月がなぜ「八月のこどもたち」記述群を執筆したのか、その動機をあきらかにするものである。検討の結果、如月の「八月のこどもたち」記述群の執筆の動機は時期によって変化しているものの、如月自身が持っている実践に対する自己肯定感をふまえたうえで、そこにある迷いや不安、苦悩についても記述し、読者に批判的に検討されることによって議論されることを期待していると読みなおすことができると結論づけられた。

【第４章】第４章では、第３章で検討した如月小春の「八月のこどもたち」記述群を読解した経験が、筆者の実践に対する理解をどのように更新したのか、その更新の物語をオートエスノグラフィーの記述の方法を用いて提示した。オートエスノグラフィー『アリスについて』は、語り手である〈私〉が、過去の自分である〈アリス〉について、〈アリス〉に関係する人々に会い、〈アリス〉についての情報を集めていくというスタイルで書かれた。このオートエスノグラフィーによって、〈アリス〉はかつて自分の実践について肯定的に考えていたものの、〈K〉の本（これは「八月のこどもたち」記述群のことである）を読み検討したことによって、自身の実践における参加者に対する暴力的な態度をふりかえる契機をあたえられる物語が示された。

【第５章】第５章では、第４章のオートエスノグラフィー『アリスについて』を、第２章で検討したオートエスノグラフィーに基づく実践報告の批判的な検討のための手続きにそって確認しなおした。さらに、『アリスについて』の記述に際して適用されたオートエスノグラフィーの方法

論を整理しなおした。この作業によって、オートエスノグラフィーは、過去に書かれた実践報告を批判的に検討した結果をふまえて、為された実践についての個別的なふりかえりの成果を記述することができ、さらに別の読者に読まれ、批判的に検討されることを期待することができること、また、このようなオートエスノグラフィーの読解と記述が連環することによって、演劇教育実践についての個別的かつ批判的なふりかえりは、実践の改善、発展を志向して蓄積可能なものになることを期待できることがあきらかになった。